

2009年5月31日発行  
第1巻 第7号  
2009年6月号



ナショナル  
ジオグラフィック  
日本版

# NATIONAL GEOGRAJAP



2大特集

阿蘇山／ガラスアート

FICTION JOURNAL OF THE NATIONAL GEOGRAJAP SOCIETY



WADARYU

<http://www.wadaryu.com>

## 清里でもナメナメクージを一般公開



人工繁殖に成功し、その研究機関の1つで一般公開も実施されたナメナメクージが、今度は清里の某美術館でも公開された。生物の展示を美術館で行うという新しい試みについて、ナメナメクージの発見者で研究の第一人者の一井長馬准教授はこのようにコメントしている。  
「ナメナメクージの美しい姿は芸術に

値するという説得を受けて、美術館での展示に踏み切りました。ナメナメクージは環境に順応する能力が極めて高く、来場者の監視体制さえ厳重であれば、美術館でも問題は無いのです。むしろ、ほとんど動くことのないナメナメクージにとって、湿度や温度が安定している美術館は快適な環境だと言えるでしょう」

### 読者の皆様へ

©JAP Inc.

●「ナショナル・ジオグラフィック」の内容はすべて、架空のもので、実在する団体、個人とは一切関係ありません。  
●「ナショナル・ジオグラフィック」の内容の全部、または一部を無断で他のメディアに転載することを禁じます。著作権はすべてJAP工房に帰属します。

●参考文献：「日本文明の謎を解く」（清流出版刊）、「文字の起源と歴史」（創元社刊）、「消えた古代文明」（講談社刊）、「古代遺跡ミステリー」（教育社刊）、「超古代オーパーツFILE」（学習研究社刊）、「世界の宗教101の謎」（河

出書房新社刊）、「図解 曼荼羅大全」（東洋書林）、「芸術新潮 1999年1月号」（新潮社）、「古事記」（岩波書店）、「太陽 1971年7月号」（平凡社）、「別冊太陽 白川静の世界」（平凡社）、「別冊太陽 梅原猛の世界」（平凡社）、「逆説の日本史 封印された[倭]の謎」（小学館）

●Photo：Jap-inc、Studio Zimp、©pierre-Fotolia.com

**JAP NIGHT VOL.13**



**開催決定!**

あの夢の競演バンド『JUMPING JAP STARS』  
そして、キング・オブ・ゴシック『AUTO MOD』が出演決定!!

**69SALEは  
6/6～開催  
@JAP**

## 柵の中のアニミズム



山梨県北杜市には、町村合併以前にその地域を大泉村と名づけた由来を持つ湧水がある。しかし現在では地域住民でさえ、その存在を知る者は少ない。

豊富な水量を誇り、かつて「泉さん」と呼ばれたこの湧水は、現在でも水産研究施設の大切な水源となっている。そのため施設内であるにもかかわらず、柵によって嚴重に囲まれ、セキュリティ

システムが備えられている。地域住民であっても、事前の申込みをしなければ見学することすらできないのだ。

歴史を持ち、現在も枯れることなく存在し続けている湧水の多くは観光地化してしまっている。そうした中で目的は別にあるとしても、ひっそりとした山中で、日本のアニミズム的文化が守られていることに喜びを隠せない。

## 「パラミータ」ブームの謎

日本では密かにパラミータ文明がブームになっているらしい。この喫茶店の名物であるカレーも、最近ライスピラミッド型にして話題になっている。店の常連客であるパラミータ文明の研究者が発案。「ピラミッド型のライスにすると、カレーがまるで一晩おいたように美味しくなっている」と店の客に好評だとか。



# 髑髏に 魅了された ガラスアーティスト



東京都武蔵野市のギャラリーで開催された個展「永井煌晟ガラス展  
ガラスの髑髏たち」の展示風景。

日本を代表するガラス工芸アーティストの永井煌晟は、デンマークのエーベルトフトガラス美術館が主催した「Raticello 2002」において、世界から選抜された13名の1人に名前を連ねた。その彼が今、魅了されているのが“髑髏”。髑髏をモチーフにした作品群を一堂に集めて東京・吉祥寺で開催された氏の個展を取材した。



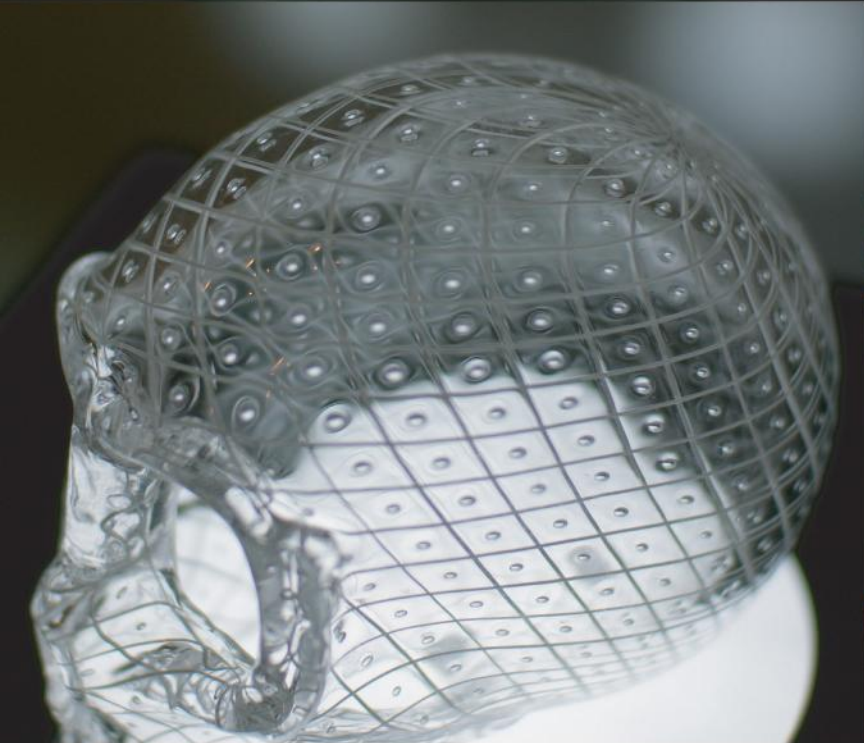
## 世界的アーティストが魅了された髑髏

東京・吉祥寺のギャラリーで世界的なガラス工芸アーティスト、永井煌晟 (Kousei Nagai) の作品展が開催された。

2002年にデンマークのエーベルトフトガラス美術館の主催によって行われた「Raticello 2002」で認められ、デンマークの王宮にも作品が飾られたことでも有名な永井氏。氏の作品は、

ベネチアンガラスが発展させた技法であるフィリグラナ (レースガラス) を駆使した繊細なデザインが多い。

しかし今回の作品展の展示作はそうしたこれまでの作品群とは趣が異なる。なんと作品のテーマは“髑髏”なのだ。展示スペースに限りがありながらも、ロック・スピリットにあふれた作品展を数多く開催していることで有名なギャラリー「Guild-unit Art Space」を会場にしたのもそのためだ。



網目交差模様のレースガラスの1マス1マスすべてに気泡が入っている。永井煌晟はこの技法を駆使したガラス食器で世界の13人に名を連ねることになった。





「こうした作品が広く受け入れられるものでないことは分かっています。自分が好きで作っているガラスの髑髏を発表する場を得られたことがうれしいですね」

既存概念にとらわれることなくチャレンジする永井のファッションはシルバークラッセで身を包み、ロックミュージシャンのようだ。

## 困難を極めた髑髏造形

ガラスの髑髏の制作方法は見た目以上に困難だ。髑髏らしいフォルムを形作るために試行錯誤を繰り返したという。特に眼窩(がんか:眼球が入る頭蓋骨のくぼみ)は穴をあけるだけでなく、その周囲を盛り上げなければ髑髏らしさは表現できない。

髑髏制作は永井を含む3人の共同作業だ。吹きガラスで膨らませおおよその形を作ると、それをガラスの温度が低下しないように何度も熔解炉に入れて熱し続けながら、眼窩の周りを少しずつ盛り上げていく。しかも永井はフリグラナ・ア・レティチェッロ(網目交差模様)の間に均等に気泡を並べる高度な技法を髑髏にも使う。「交差模様の1つ1つに美しく気泡を入れるだけでもテクニックが必要です。それをさらにリスクの多い髑髏の形するなんて馬鹿げているという人もいます」

世界が認める最高峰のガラス技法を駆使して完成させたアート作品——それがガラスの髑髏なのだ。



「永井煌晟ガラス展 ガラスの髑髏たち 2(仮)」を再び「Guild-unit Art Space」で開催決定!!

日時:2009年7月31日(金)~8月12日(水)


場所: Guild-unit Art Space

東京都吉祥寺南町 1-15-5

電話/ 0422-49-1347

# 阿蘇山と 日本の歴史

世界有数のカルデラを持つ阿蘇山。  
現在も活火山であるこの山は  
30万年前から大規模な噴火を繰り返し、  
中国の歴史書にも噴火の記録が残っている。  
“火の国”熊本のシンボルとなっているこの地を  
パラミータ文明研究チームのリーダー、  
ウロボン・イマカワック博士が訪れた。



阿蘇神社の神事、火振り  
神事に参加するウロボン  
・イマカワック。

## 縄文時代の遺跡が残る 阿蘇のカルデラ

多忙を極めるウロボン・イマカワック博士 (Urobon Imakawak) が、日本に滞在したのはわずか3日間。調査最終日の夜に行われていた阿蘇神社の奇祭「火振り神事」に参加したイマカワックが興奮していたのは、危険極まりない奇祭のためなのか、それとも予想以上の収穫を思い出していたからなのか……。

U・イマカワックの調査結果の発表までは少し時間を要する。その前に近年になってさまざまな説でにぎわう阿蘇山とその阿蘇山を中心とした日本の歴史について整理しておきたいと思う。



日本三大楼門に数えられている阿蘇神社の大楼門。阿蘇神社は日本各地に450あり、ここは健甞龍命を主祭神とする総本社である。2000年の歴史があると伝えられている。

世界有数のカルデラを持つ阿蘇山は、日本の西にある大きな島、九州の中央に位置する。“阿蘇”という名前は日本最古の歴史書の1つ『日本書紀』にはすでに登場する古い地名だ。現在の阿蘇山はカルデラ中央にある活火山の中岳噴火口付近まで遊歩道が整備され、日本国内はもちろん、海外からの観光客で賑わっている。

かつて阿蘇山のカルデラは湖だったが徐々に湖の水が引き、現在のような平地が現れた。この地域の地下水が豊富で湧水に恵まれているのはそのためだ。阿蘇神社に祀られ、阿蘇山の神とも言われているタケイワタツミノミコト(健甞龍命)が外輪山の一部を足で蹴破って、湖水が流れ出たという言い

伝えもある。

カルデラには縄文時代の遺跡が多く、土器や石器の出土が多い。日本有数の黒曜石の産地でもあり、阿蘇の黒曜石は九州全島で見ついている。また阿蘇特産のピンク石は、500キロメートルも離れた本州の奈良県などに点在している古墳に納められた石棺に使われていることがわかり、阿蘇の石が古代の王や豪族たちにとって特別な存在であることが判明している。

九州地方の郷土史研究家である川上猛 (Takeshi Kawakami) は、この地が有史以前に日本の古代文明の中心地であったと主張する。

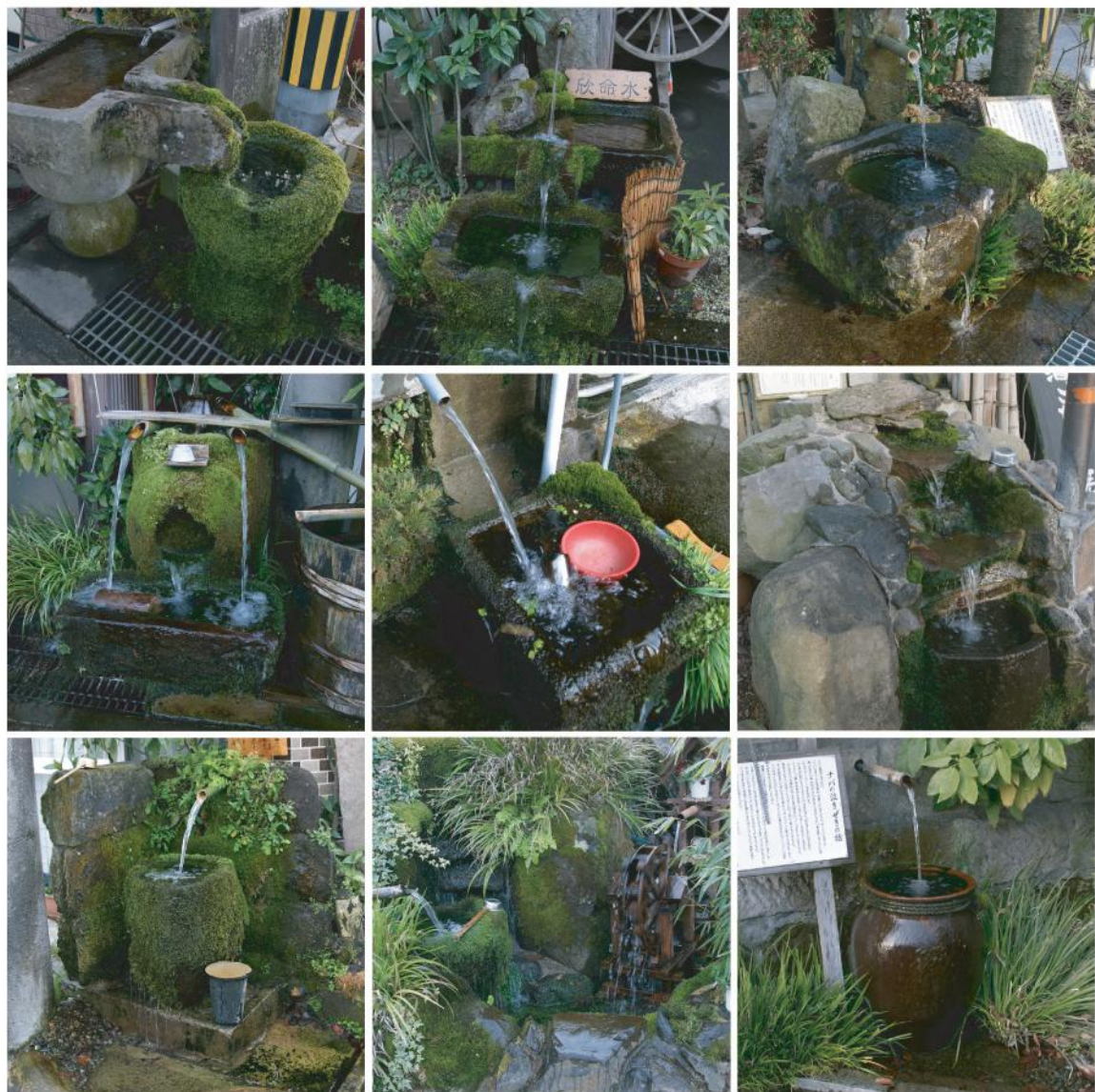
「日本最古の歴史書『古事記』に登場す

る高天原（たかまがはら）は天上界のことを指した架空の地という説が一般的だが、阿蘇のカルデラが高天原だと考えることができるのではないだろうか。ここには縄文時代初期に縄文文明よりもはるかに文明の発達した阿蘇文明とも呼べる古代文明の痕跡も見つかり、それが高天原として伝え残されていると私は考えている」

川上猛が研究を進めている阿蘇文明について、U・イマカワックは大きな興味を持ち、パラミータ文明との関連性を示唆している。

「川上が阿蘇文明と呼んでいる古代文明は、我々が追っているパラミータ文明と大きく関わりがありそうだ。川上

阿蘇外輪山から望むカルデラと阿蘇五岳。遠くに見える山は左から根古岳、高岳、中岳、烏帽子岳、杵島岳。



縄のついたカヤの松明に火をつけて振り回す豪快な「火振り神事」は、国の重要無形文化財に指定されている「阿蘇の農耕祭事」の1つ。その神事が行われる阿蘇神社周辺には数多くの湧水が点在する。火と水は古代から大切なものとして扱われてきた。

が提供してくれた資料を持ち帰り、研究チームで精査する」

これまで日本国内では注目を浴びることのなかった川上猛の研究だったが、カルデラとパラミータ文明の関連性を指摘するU・イマカワックにとっては、これまでにない重要性を秘めていたのだ。

## 『古事記』『日本書紀』 と阿蘇文明

日本列島における人類の歴史は約10万年前にさかのぼるが、狩猟による移動生活から定住生活へと移行するのは約1万6000年前の縄文時代。この縄文時代は紀元前10世紀頃まで続き、晩期には稲作を中心とする農耕社会が成立していた。

川上猛は縄文時代初期に縄文文明とは別の高度な古代文明が阿蘇を中心とした地域に存在していたという。

日本最古の歴史書『古事記』と『日本書紀』では、日本はイザナギとイザナミという2柱（日本では神を数えるときに“柱”を用いる）が作ったとしている。そして神々が住む高天原から神の1人であるニニギが地上に降り、その子孫がやがて日本の長となった。もちろんこれは神話だ。

『古事記』や『日本書紀』を事実の比喩的表現だとする説は多いが、“神＝中国大陸からの渡来人”とするのが一般的。だが、それでは記紀を説明できない部分も多い。川上猛は記紀で語られている神話の多くは現実にあった事柄の比喩的表現だとし、“神＝阿蘇の高度な文明人”と置き換えることで説明がつくという。神が高天原から地上に降りた天孫降臨（てんそんこうりん）の地とされている高千穂は、阿蘇からわずかに北東約25キロメートル。阿蘇山から降りてきた阿蘇文明人が高千穂へたどり着き、彼らの高度な文明によって、縄文文明人から神のように崇められたと読み取ることができる。

阿蘇文明は縄文時代初期の約1万5000年前頃にはすでに存在し、縄文文明をはるかにしのぐ高度な文明で栄えていた。大陸からも多くの渡来人が日本列島にたどり着き、高度な文明を求めて阿蘇を目指した。阿蘇文明は渡来人によって滅ぼされてしまったのか、その末路については確かなことはわかっていないがある時期を境に忽然として姿を消し、渡来人がその後の日本において文明の中心となっていった。

阿蘇泉神社の阿塑（おそ）像についても阿蘇文明の遺物ではないかと川上猛は推測している。U・イマカワックも近年見つかっている南米エクアドル沖の像、サントリーニ島のディアボロウス像などの調査結果から、日本にある阿塑像も1万年以上前の遺物である方が自然だとする。

「3つの像は腐蝕の度合いに差はあるが、デザインは完全に同じものだ。この3つの遺物が違う年代に作られたというのは考えにくい」

阿蘇泉神社を訪れたU・イマカワックは、阿塑像とは別の資料も発見した。分析結果によっては阿塑像に匹敵する可能性もあるというが、現時点ではまだそれがどのようなものなのかは公表されていない。



阿蘇泉神社の祭神、阿塑像。12年に一度だけ拝謁を許される。神社には3000年前からの来歴記録が残っているが、その真偽は不明。



## 阿蘇文明の痕跡

阿蘇には巨石伝説が数多くある。これまではそうした伝説を持つ巨石に相互関係は存在しないとされてきた。だがカルデラ内に点在している巨石と遺構のいくつかは、阿蘇文明の時代に意図を持って一定の法則で配置された可能性がある。

外輪山のカルデラ内の麓にある三閑稲荷神社の巨石もその1つだ。うっそうと生い茂った木々の間に敷き詰められた石畳の参道を数百メートル進んでいくと小さなプレハブの社があり、その後ろに石造りの小さな祠がある。裏手から見ると、祠が巨石の上に建てられていることがわかる。

外輪山のカルデラ内側には、三閑稲荷神社のように御神体としてまつられている巨石をはじめ、8つの巨石と、4つの司祭的な遺構が円を描くようにして並んでいるのだ。

この配置を知ったU・イマカワックは、さらに阿蘇文明とパラミータ文明の強い結びつきを確信した。「阿蘇文明時代の4つの遺構がどのようなものであったのかは今後の調査の結果を待たなければならないが、12の遺跡類が均等に円周上に並んでいるのは、パラミータ文明と大きなつながりがあるのは間違いない」

世界的文明の祖が、日本にあった可能性も出てきた。



三閑稲荷神社に向かう石畳の細い参道には延々と鳥居が続く。この先に社があり、その後ろにある階段の先に小さな祠がある(右ページ写真)。御神体は祠の下にある巨石だ。







## NEXT ISSUE

次号「NATIONAL GEOGRAJAP」は、  
秋頃公開予定。  
阿蘇文明とパラミータ文明の謎に挑みます。

『NATIONAL GRAJAP』にご意見、ご感想をお寄せください。

[grajap@live.jp](mailto:grajap@live.jp)